

序

平成31年/令和元年度はりんくう総合医療センターが地方独立行政法人化してから9年目、さらに大阪府立泉州救命救急センターとの統合後、7年目の年でした。当センターは救命救急病床30床、感染症病床10床を含め、総病床数388床を有しており、大阪府がん診療拠点病院、地域医療支援病院、災害拠点病院としての機能に加えて、泉州救命救急センター、泉州広域母子医療センター、特定感染症指定医療機関であるなど、極めて特徴的な医療機能を有した高度急性期病院です。母子医療に関しては、市立貝塚病院との泉州広域母子医療センターの共同運営を行い、産科医療・新生児医療(NICU)という極めて重要な役割を果たしています。また、関西国際空港の対岸という土地柄、当院には国際診療科があり、国際診療の分野でも全国的にも有名な施設です。近年、海外、特にアジア地域からの旅行者数が激増し、海外からの当センターへの受診も増えており、大阪在住外国人の診療も増加しています。平成28年度末にはインバウンドの国際診療がさらに充実できるように国際診療科の新装移転を行い、平成30年3月から専門医師による国際外来も開設しました。平成30年10月には外国人患者受入れ医療機関認証制度(JMIP)の3回目の認定更新を行いました。

更に、平成30年4月よりDPC対象病院の中でII群、DPC特定病院群(大学病院本院と同等の高度良質な医療を幅広い疾患に対して提供できる病院)に指定され、大阪府下でも極めて限られた大病院の仲間入りをし、日本医療機能評価機構から令和元年3月には5回目の病院機能評価の認定(バージョン:3rdG:Ver.2.0、一般病院2)を受け、令和2年3月にはNPO法人卒後研修評価機構(JCEP)による研修病院の認定を受け、大変喜ばしい限りです。

一方、当センターでは泉州南部における病病連携・病診連携をより迅速にする診療情報連携システム「なすびんネット」を導入し、地域医療連携を積極的に進めてきました。泉佐野・泉南医師会の先生方との病診連携をさらに活性化させるため、平成29年4月より、りんくうメディカルネットワークを立ち上げ、地域の先生方との積極的な交流・情報交換を行ってきました。『泉州南部卒後臨床シミュレーションセンター(サザンウィズ)』では、臨床技能の習得及びチーム医療の充実を図る教育プログラムを実践しており、この斬新な試みもあって初期研修医の人気も急上昇し、研修医枠も増えました。また、業績欄にも記載されていますように、多くの国内外の学会発表や英文・和文論文も発表され、その量及び質は他病院にも誇れるのではないかと自負しています。

南泉州地域では健診受診率が低く、癌や循環器疾患による死亡率が高いことが知られていますが、予防医学を推進し、研究マインドをもって南泉州地域の特色を活かした事業を多彩に進めるため、2018年4月より「りんくうウェルネスケア研究センター(RICWA)」を開設しました。本センターでは地域の健診受診率を向上させ、生活習慣病や家族性高コレステロール血症などの高頻度な遺伝病の早期発見・治療を目指して、地域の保健師の教育や特定健診の指導等も行っています。

当センターでは消化器内科、眼科、呼吸器外科、放射線科、等の一部診療科医師が不足していましたが、消化器内科医4名、呼吸器外科医2名、放射線科医2名、糖尿病・内分泌代謝内科医7名体制となり、甲状腺センターも開設され、人材が充実してきました。一方、当センターは重症急性呼吸器症候群(SARS)、新型インフルエンザ、エボラ出血熱、中東呼吸器症候群(MERS)等の新興感染症のアウトブレイクに備えて、我が国に4病院しかない特定感染症指定医療機関であり、関西の砦という重責も担っています。令和元年末から世界的に広まった新型コロナウイルスの感染者の診療も厚労省や大阪府からの依頼を受け、地域住民の命を守るため病院一丸となって対応しており、泉州地域の中核として最新の医療を提供できるように頑張りますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

理事長 山下 静也

序

この度、山下前病院長の理事長就任に伴い、2020年(令和2年)7月1日付で病院長を拝名いたしました。

平成10年に大阪大学特殊救急部(現、高度救命救急センター)から当時の大阪府立泉州救命救急センターに赴任して、すでに23年が経ちました。元来は救命医として、重症救急一筋、特に重症外傷患者の診療に従事してきましたが、この23年間の間に、泉州救命救急センター所長、りんくう総合医療センター副院長兼救急診療部長、患者サポートセンター長等を歴任、兼務し、救急医療は地域医療の根幹であり、地域の医療機関との病々連携、病診連携の重要性を痛感してきました。

そしてこれまでに、脆弱な泉州地域における救急医療体制の強化を目的にした「面で受ける救急医療体制」の構築(平成21年)、りんくう総合医療センターおよび泉州救命救急センター、それぞれの更なる機能強化を目指して「高度専門医療と重症救急医療の統合」をスローガンに行った泉州救命救急センターのりんくう総合医療センターへの移管統合(平成25年)、すべての患者さんに入院前から退院後までの切れ目のない支援を届ける「患者サポートセンター」の設立(平成30年)、その他、地域医療支援病院として病々連携・病診連携の強化を目的とした病々連携協議会の立ち上げ(平成28年)、そして今年の新型コロナウィルスのパンデミックに対する診療体制の構築など、病院改革、地域医療改革を、関連する多くの方々と連携して進めてまいりました。

りんくう総合医療センターは、図らずも、私が泉州救命救急センターに赴任する1年前の平成9年9月に「軸足は地域に、目線は世界に」という大きな旗印を掲げて、関西国際空港対岸のりんくうタウンに移転し現在に至っています。泉州南部唯一の基幹病院として、全国で4か所しかない特定感染症指定医療機関、泉州救命救急センターや泉州広域母子医療センター、災害拠点病院、大阪府がん拠点病院などの、広域で提供すべき政策医療を担う高度急性期医療を提供してきました。これらの実績が評価されて、厚生労働省から、DPC特定病院群(全国156病院、大阪府下14病院)に指定されています。

加えて、大阪府外国人患者受け入れ拠点医療機関にも指定され、外国人患者受け入れ医療機関認証制度(JMIP)の施設認定を2度更新しており、国際診療にも力を入れています。

また、平成30年には、りんくうウェルネスケア研究センター(RICWA)を設立し、健診・人間ドック部門を充実させました。大阪府下でも特に低い泉州地域の健診受診率の増進を図り、病気の早期発見、早期治療に結びつけるとともに、当地域の未病対策にも力を入れています。

今後は、地域医療支援病院として、急性期医療後の後方連携の充実や在宅医療の後方支援の強化なども推進し、地域包括ケアシステムの構築においてもコミットする病院を目指します。

このように、りんくう総合医療センターは、予防から高度急性期医療、さらには地域包括ケアシステムまで、当地域における医療・介護・福祉の様々な局面において、中核的な役割を担う医療機関です。

今後も、患者さん、当地域の医療機関の方々、そして我々りんくう総合医療センターの職員も、皆が納得できる医療を届けられるよう、精励していく所存ですので、ご支援のほど、宜しくお願いします。

病院長 松岡 哲也